

南島における陰陽道系説話の展開

小池 淳一

一 はじめに―陰陽道系説話の定義とその視角

陰陽道は日本で成立した呪術的宗教体系であるが、その要素は中国の陰陽五行説や道教に起因するものが多く、中国文化との区別がつきにくい側面を持っている。特に民俗文化に流入した陰陽道については、その傾向が強い。奄美・沖縄といった南島の島々における陰陽道について考察する場合にこの点は注意が必要である。

本稿はそうした南島における陰陽道の存在の様態とその展開の特色を説話に着目して探ろうとするものである。筆者はこれまで陰陽道系の説話や陰陽道書の書写等に注目することで、陰陽道の民俗文化への浸透過程を考察してきた「小池一九九三、二〇〇一ほか」。ここではその両方の視点を統合することを意識しつつ、南島の陰陽道系説話の様相に検討を加えてみたい。

ここでいう陰陽道系説話とは広義には陰陽道に関わる全ての説話をさすが、狭義には『簠簋抄』収載の、なかでも由来（三國相伝簠簋金烏玉兔集之由来）の説話をさす。これに注目するのは『簠簋』そのものが、近世以降、広く版行され、知られた陰陽道書であり、その書物の由来を説くこの説話が前近代における陰陽道に関わるさまざまな認識を集約していると考えられるからである。

そこでまず最初にこの『簠簋』由来の説話（以下、「由来」と略記する）の内容を確認しておこう。この説話は、陰陽道独自のものではなく、さまざまな説話集に収録されている説話や注釈、あるいは口頭での伝承を含み込んで成り立っているものである。その編成にも注意すべきであろうが、ここでは指摘するにとどめておく¹⁾。

「由来」は以下のような説話から構成されている。

- ① 天竺から唐への伝来。文殊菩薩から伯道上人へ。
- ② 唐から日本への伝来。吉備真備が鬼神となった安倍仲丸や

長谷寺の観音の援助によって難題を克服し、安倍の童子に伝える。²⁾

③常陸に場を移し、竜宮からの伝来が語られる。安倍の童子は亀を助けて竜宮へ赴き、石の匣と烏葉を得る。

④「聴耳」。安倍の童子は鳥の囀りを人語に聴き、天皇の病氣の原因を知り、治癒に成功して安倍清明と名乗る。

⑤「狐女房（信太妻）」。「清明の母親は狐で和歌を残して去る。

⑥道満との争いⅠ。清明加持により柑子を鼠に変えて勝つ。

⑦「九尾の狐（殺生石）」。「犬御（追）物、玄能の由来。

⑧道満との争いⅡ。清明が伯道の下で修行中に道満は清明の妻と密通し、書物を盗み写して、帰ってきた清明を倒す。それを知った伯道が清明を再生させ仇をとる。

一見して明らかなように「由来」は、さまざまな説話集所載の説話や口承文芸研究においてよく知られた話型を取り込んでおり、個々の説話の系譜や位相を考える必要がある。それとともに、これらを一続きのものとし、随所に破綻はあるが、中世から近世初めにかけて陰陽道書『叢書』の由来と位置づけられたことをここでは重視したい。いわば、これらの説話（群）は陰陽道に関係づけられることで宗教文化的な意味を持つといえるのである。

以下、こうした視角から、沖縄の先島地方における年中行事の由来譚と陰陽道系説話との関わりについて考察し、次いで奄美群島のなかでも喜界島におけるソウシ（双紙）由来譚の位相

とその周辺についても考察したい。このような具体的な検討を通して、南島における陰陽道系説話の伝承が示す意味について明らかにしたいと考える。

二 清明祭とその由来譚

「由来」の説話群のなかでも印象深いのは⑧の道満と清明との二度目の争いである。種々の説話を経た上での結末に位置するだけではなく、この部分が伝承例はそれほど多くはないものの、各地に伝わり独自の展開を呈している点が重要であろう。

既に検討してきたように、この⑧の説話を、三番叟和尚との争いに読み換えたのが青森県下北半島の民俗芸能である能舞「三番叟」の由来譚であった。下北半島の東通村域を中心に広く伝承されている能舞は里修験が深く関与している山伏神楽である。その中でも重視される「三番叟」の主人公のサンバ（三番叟）の面が黒く、顎が可動式になっている点を説明する際の説話が⑧にあたるものであった。一度死んで再生する主人公が晴明から三番叟に、敵役が道満から和尚に、さらに主人公を再生させる人物として伯道が翁へと変化している「小池 一九九三 六八〜七二」。

この説話は芸能の上演に携わる人々やそれらを見る村人たちの間に伝承されてきた。芸能そのものと密接に関わりながら伝承されてきたのである。このことは陰陽道系説話がこの地域の

芸能の担い手であった里修験によって管理され、変形していったことを示すものであろう。説話の変化に担い手の歴史的文化的な位相が投影されているのである。

この型の昔話は本州では青森、福島、新潟などに点在する一方で、沖縄にも集中的に伝承されている「小池 一九九三七三」。沖縄での伝承を改めて整理してみると、管見の範囲では次の表のような広がりを示している。

伝承地	仇の名前・属性	結果	出典
沖縄県島尻郡栗国村西	ヒガン	清明と彼岸の由来	沖縄民俗15
沖縄県那覇市田原	妻の愛人	清明のはじまり	那覇の民話資料1小禄地区
沖縄県宮古郡伊良部村	姦夫	犬の肝臓を清明に移植	伊良部村史
沖縄県宮古郡多良間村	マフダ大時	ヤモリは鶏に食べられる	多良間の民話
沖縄県宮古郡多良間村	ウプトウキ	ヤモリと鶏は仇同士	多良間の民話
沖縄県八重山郡与那国町久部良	トゥブンコ	清明祭りのはじまり	与那国の昔話
沖縄県八重山郡与那国町祖納	ソブンコ	三十三年の焼香のはじまり、清明?	与那国の昔話
沖縄県八重山郡与那国町比川	十六日	清明が時を分ける、清明祭	与那国の昔話

注目すべきなのは、那覇市田原での伝承を除くと、先島地方をはじめとする離島部に比較的多く伝えられている点である。また主人公の清明の名を清明祭をはじめとする行事の由来と結

びつけた語りになっている場合があることも重要のように思われる。南島、とりわけ沖縄県域では、陰陽道系説話のなかでも⑧のものが、その骨格、話型を維持しながらも独自の分布を呈し、さらに年中行事の由来を述べるという独自の社会的な機能を持つているのである。これらの点が南島におけるこの種の説話の位相を示していると考えられる。

そこでまず、その内容を確認してみたい。岩瀬博らによる『与那国の昔話』に収められている「清明祭の由来」である。

昔、とうん。

昔、清明という祭りの話をするから聞いてください。

清明というのは、昔、清明という人と、トゥブンコといいなさる人二人がいらつしゃったというが、その二人の人は沖縄中で一番頭の良い人でありなさったそうさ。その二人が争いをして、

「この島は、私が治めるのだ」

「私が治めるのだ」と二人で争っていたというが、清明という人が、そんな事はできないと神様の所に行つて、この清明という本を習つてきてはじめて島を治めることができると思えなさつて、天に上つていつて、神様に習おうとして、行きなさつたが、その清明という人は、妻は家に置いて、その清明という本をかついで、天に習いにと上りなさつたが、(中略)その時に、天に行く前にトゥブンコと賭け

事をして、清明という人と。

「自分が清明の本を天から習ってきたら、どうするか、また習ってこなければどうする」と賭けをしてから行つたというが、その賭けに、だれが負けても、負けた人の首を取るとの賭けをしていたので、帰ってきてその夜寝ていると、妻は清明がいない間に、トゥブンコがだまして妻にしているところへ、夫が帰ってきて、その夜寝ている間に、妻が清明の本を盗み、夫の持ってきた物をトゥブンコに書き写させておいて、また、今夜が開けたのでトゥブンコが、「さあ、お前が習ってくると言つた物、何を習つて来たか」と言つたので、

「私は清明の本を習ってきた」と言つたところ、

「じゃ、どんな物か」と言つたので、

「じゃ、こんな物だ」と出すと、それはその夜のうちに、妻が盗んでトゥブンコに書かせたから、

「私にもそんな本はある。そんな物は親たちもとつくに知っている。なあと、そんな物だったら、お前の負けだから、お前の首をとる」と言っているうちに、

神様が天からごらんになつていて、降りてこられて、「お前は誰から習つた物か」と尋ねたから、何も返答することができなくて、負けたと言つて、トゥブンコと自分の妻は一緒になつているから、トゥブンコと一緒に清明の妻の首もとつて、二人とも首をとつて捨て、それから帰ってきた

お礼しにと、天に行く時に、口のきけなかった女の子が初めて物を言つて、

「私があなたの妻になります」と、「私はその人を夫にします」とはじめて物を言い、夫婦になつて、たいへん大物になり、島中の行いは清明にはじまつたのだと、そのひとを拝むのが、清明祭りとなつているという話したとさ。

清明祭りというのは、祖先への祭りごとではなく、清明という人を島中の人々が拝んでいるんだよ。⁴⁾

ここでは、⑧の道満にあたる敵役がトゥブンコとなつている他、中略した部分には天の世界を訪問する際の独特の挿話が付け加えられている。

与那国島ではここに掲げた以外にも二つの伝承が記録されており、それらでも清明祭への言及がなされている。多良間島の場合だけはヤモリと鶏の習性に結び付けられているのに対して、粟国島や那覇市でも清明祭をはじめとする年中行事に関連させて語られており、比較的広くこの説話が年中行事を説明する機能を果たしていることを改めて確認しておきたい。

次いで、この点を意識しながら、南島の民俗事象のなかでも清明祭の位置付けについて確認してみよう。一般に清明祭は、沖縄の民俗文化では先祖祭祀の機会として位置づけられている。しかし、必ずしも古くから広く定着しているわけではないことがこれまでも指摘されてきた。このことはここで掲げた伝承で

も清明祭の意味に関する説明が付されていることからもうかがうことができよう。

清明祭は、沖縄本島北部の国頭村安波では町方から習って始めたものとか、土族だけのものではあったとされている〔常見一九六五 四七〕。また同じく本島の名護市の旧羽地村では明治四〇年代に導入が図られたことが史料から明らかであることが小川徹によって指摘されている〔小川 一九七二、一九八七〕。さらに、王府の影響が強い伊是名島でも一九世紀後半に清明節における墓参が普及したと考えられている〔平敷 一九九五 九三―九六〕。

つまり清明祭そのものが土族の村落への定着あるいは土族文化の影響のもとに意識され、実際に行われるようになっていたのであり、民俗文化のなかに連綿と伝わってきたものではなかったのである。そしてそれだからこそ、新しい馴染みの薄い行事の意味や来歴を言語化する必要が生じ、その説明に陰陽道系説話の一部で、行事そのものの名称と主人公の名とが音通する説話が語られるようになったのではないだろうか。

このことを再度、説話そのものの伝承過程としてとらえると「清明の賭け」は清明祭をはじめとする先祖祭祀に関する行事の由来譚として伝承されてはきているものの、行事そのものとの直接的な関わりは薄かったのではないか。さらに両者の結びつきは本来的なものではなかったであろうことが推察される。

このことは「清明の賭け」さらには陰陽道系説話が清明祭と

安倍晴明との音通によって、新しい先祖祭祀の行事由来を説き、その来歴を説明するために用いられてきたことを示していよう。陰陽道の説話が清明祭をはじめとする先祖祭祀に結びつけられていくにあたっては、その背景に先祖祭祀を新たに勧める、ある種の唱導活動をうかがうことができる。この説話が南島において伝承されるにあたってはそうした新たな先祖祭祀の担い手とその知識とが関与していたであろうことが推測できるのである。

三 喜界島のソウシ由来譚

先島地方をはじめとする沖縄県域での陰陽道系説話が前節で検討したように、先祖祭祀と関わって展開してきたことが確認できた。その一方で、陰陽道に起因するさまざまな暦日の知識を記した書物（ソウシと呼ばれることが多い）が宮古島南部を中心に守護神（マウガン）信仰と結合していることは既に論じたことがある〔小池 二〇〇二〕。ソウシは『簞篋』の内容を漢字仮名交じり文に書き直した部分を中核とする大雑書の写本なのである。

この類の書物が、同じ琉球文化圏のなかに位置づけることができる奄美地方ではどのような展開を示しているか、書物そのものとその由来譚について検討を加えてみよう。既にこの問題については従来の調査成果および検討成果を通覧して課題を

提示したことがある「小池 二〇〇九 一一四―一二七」。こうしたソウシの伝来は陰陽道の知識の象徴であると同時に陰陽道の具体的な浸透が書物のかたちをとったことを示している。

そうした奄美地方のソウシをめぐる具体的な問題として、興味深いのは、喜界島志度桶における我原家の伝承と同家に伝来した「要書」の存在である。我原家はノロの家筋で、また男性はトキも務めていたといい、先祖の話として、以下のような説話と伝承の事情とを伝えている。

始祖の母親が娘のころ、天ツ神が天降って、ちらし子をした。男の子だった。父親がわからないので世間からはトメエガア（拾い子）と侮られ、友だちからは父無し子といっでいじめられた。七才の時、子供は母親に僕のお父さんは誰か教えてくれ、でないと友だちは僕を馬鹿にしていっしょに遊んでもくれないといっで泣くので、母もしかたなくあなたのお父さんは天の神様だと語った。子どもはそれならお父さんに会って来るといっで天に登った。

天神の屋敷に行つて門番に、父に会いたいといつたら、天神は不敬な奴だ河に放りこめと命じた。荒くれ男どもが出て来て、子供を三十三びろの川につき落とすと子供はひらりと向う岸へ飛んだ。向う岸でつき落とすとひらりとこっちの岸へ飛んだ。これを天神に報告したら、荒馬に蹴殺させと命じた。だが天一番の荒れ馬も子供がそばに行くくと猫のようにおとなしくなった。これを天神に報告したら黒煙

に巻かせてちっ息させろと命じた。だが天の黒煙も子供の囲りだけは晴れて何の障りもない。これを天神に報告したらつれて来いといつた。子供が恐れけもなく天神の前に進むと天神は手の爪、足の爪をくらべて見て、私の子に相違ないといつた。子供は喜んでそれならいつまでも父のそばにおいてくれと頼んだ。天神はそれはいけない、私がスジャ（人間界）にちらし子をしたのは、スジャのためになることをさせようと思つたからだ。これをお前にやる。覚えたらスジャに帰つて人助けをし、夏ウリズム、冬ウリズムのお初を捧げられてスジャ暮らしせよといっで書物をくれた。子供はそれをもらつて降りて来る途中落としてしまった。急いで降りて見ると半分は大牛が食べてしまつた後だつたという。我原家のこの由来談は、祭りのたびごとに祭主の口をかりて神自らが語つたと我原氏はいう。⁵⁾

これは、我原家の「要書」の由来であると同時にユタの起源を説く神話でもあつた。南島のシャーマニズム研究の領域で日光感精説話として注目されてきたユタの始祖神話でもある「山下 一九七九」。広く南島のシャーマンの始まりを語る説話の中に書物が取り込まれているのである。この説話は我原家においては先祖の事績を主張するものであると同時に、自家に伝来した「要書」の神秘性を語るものでもあつた。天からもたらされた書物が、実在する我原家の「要書」と関連づけられている点が重要である。

「要書」は現在喜界町の文化財指定を受けており、実地に調査したところ、大雑書の写本であることが確認できた「小池二〇〇九 一一四―一一八」。また、隣の小野津集落でも「昔々、天からおソウシが落ちてきた。それを牛が紙だから食べてしまった。それで牛の第一胃袋はペラペラの本のようにになっている。おソウシワタ(腸)と呼ぶのもそのためだ」と古老たちが広く語っていたとい⁽⁶⁾う。

日光感精説話は喜界島に限らず広くユタの始祖神話として伝承されているのに対して、志戸桶の我家でソウシ即ち大雑書の写本と結びつけられていったものと考えられる。日光感精説話が先行している土壌に、ソウシが流入して、ソウシワタの説明譚として形成されたのであろう。それとともに注意したいのは、小野津集落で確認できたように、ソウシワタの説話は必ずしもユタと結びつけられずに伝承されていたことで、このことはソウシすなわち大雑書そのものの存在も広く認知されていたことを示している。

このようにソウシとそれを核とする曆占の知識、あるいはユタやトキといった担い手に関する伝承は喜界島の民俗世界において脈々と受け継がれていたように考えられる。そうしたことを念頭に置きながら喜界島の他の集落の伝承を次に検討してみたい。

四 もう一つのソウシ由来譚

喜界島において志戸桶は北端といってよい位置にあるが、南の中里集落でもソウシと「神様」と呼ばれた特異な宗教的な印象を与えた人物にまつわる伝承があった。中里の加藤コハリ氏(大正八年生)が岩瀬博氏らによる調査の際に語られたもので、「お双紙箱の由来」という題がつけられている。以下に掲げてみよう。

あのね、沖繩の方にね、家の先祖で、神様と言われているお爺さんが渡って行って。それから、王様か何か知らないけど、オーイ、オーイって言うから良い人でしょうな、その人の娘がね、病気で骨と皮になって、あのとてもやせていたらしい。

そしたら、

「あんたとこの中柱の下に蛇がいるから、その蛇を殺してしまわないと、娘さんはもう命がありませんよ」って、そのお爺さんが、その家の人に言ったらしい。そしたら、沖繩の人はみんな笑ってね、舌を出して笑ったらしい。

そしたら本当に蛇が入っていたって。そしたらオーイが舟に色々品物を積んだって、お礼に。

その荷物を積んで帰る途中で舟が遭難した。そしたら亀が出て来て、そのお爺さんを背中に乗せて助けたんだって。そして中里のタンニヤミ(地名)についたそうです。

そこでお爺さんは、

「あんたはうちを助けるつもりで来たんだなあ」と言つて、王様から貰つた刀とお双紙が入った箱を、

「あんたにあげるから」と言つて亀の背中に乗せてやつたんだそうです。

ところがまだ自分が中里から家に着かないうちに、自分の家の縁側にその双紙箱が着いていたそうです。

その双紙箱には本と刀が入っていて、刀を磨くのはお盆と正月の十六日にきれいに磨いてね、神様の刀だから今も大事にして、それを磨くのはお父さんだけで、私もあんまり見たこともありませんけどね。

それで、この家は亀に助けられたから、亀の肉を食べたら駄目つてお婆さんが言いましたもん。亀に助けてもらったからね。そして亀を取る家の人とは結婚もしたらいかんて。

そのお爺さんは神様みたいな人で、台風の時にも自分の家の畑は台風も吹かさなかつたて、その爺さんの力で。もう七代位になるんじゃない。昔の話だからね。⁷⁾

海を越えて沖縄まで病氣治しに出かけた主人公の活躍とそれによる致富譚といえようが、貰つた宝物がソウシであつたという点に注意したい。さらにそれが入れられていた箱が重視されるのは、『薑薑抄』由来の説話において、薑薑という本来は陰陽道の聖典を入れた箱に関するものであつたものが、聖典そのものの呼称にもなつていたことを想起させる。

この伝承について改めて加藤嫺に語つてもらつたところ、この話は加藤家の向かいのA家に関わるもので、主人公の神様はA家の先祖であるということが判明した。以下に掲げてみよう。

あのこのね、神様がね、沖縄に行つて、沖縄のナカバシラ、その家の娘がいつぱい病氣していたらしい、瘦せて。で、ナカバシラにヘビが入っているから、これを出したらすぐ治りますよ、言うたらしい。そしたら沖縄の偉い人が、みんな舌を出して笑つたらしい。切つたら案の定、ヘビが出てきたつて。そしてその娘さんがきれいに肥えて、治つてそして舟にいつぱい、おみやげ仕立てて、帰したらしい。多かつたからか、この舟が沈んだらしい。そしたら亀が出てきて、その神様を乗せて、そして、その家に先にオソウシか何か箱に何かアレが入っているんだ、オソウシ箱という、島では。その箱と刀は縁側に先、神様より先着いていたらしい。その話をおじいさん（舅）が私なんかにしよつたけど、そのおじいさんの親元、あつち（向かいのA家）が。その神様、自分の家にもねえ、台風の時も、風も吹かさなかつたらしいよ。やつぱし、クチ（呪詞）でしてたろうね。あの私が神様の家へ行つたらね、この神様、こんな顔の悪い、顔の悪い人、神様は。他の神様は言うんだけど。どんな神様か知らないけど。：男の人よ。⁸⁾

この説話は海亀の報恩譚の印象もあるが、ソウシの伝来にまつわる説話であることに留意すると、冒頭で整理確認した陰陽

道系説話群のバリエーションであることに気づかされる。すなわち、そのなかの④の「聴耳」と③の龍宮への訪問に該当するのである。ここでは、宗教的職能者が海を渡って沖繩―南島の文化的中心でもある―において活躍し、その人物が喜界島に定着し、そこでも活躍したことが述べられている。そうした視点に立つとA家の先祖とされる「神様」と安倍晴明とが重層的に語られており、晴明という固有名詞は伝承されてはいないものの、陰陽道系説話が宗教的な職能に関わって、さらにはソウシの由来譚として伝承されてきたことが判明する。

本節の検討から喜界島においては、日光感精説話に流入するかたちでソウシの存在を周知する説話が展開していたばかりではなく、『簞簞』の「由来」に関する説話も特定の宗教的職能者の家筋にまつわる伝承として機能していたことが判明する。陰陽道系説話の展開を喜界島でも見出すことができるのである。

五 おわりに―南島の陰陽道と大雑書の位相

以上、南島の民俗文化に関わる陰陽道系説話の展開を跡づけ、その位相について考察を加えてみた。ここでは陰陽道系説話の変奏とでも呼ぶべき説話を対象とし、方法としては説話だけではなく、年中行事や巫俗、民俗信仰などの民俗事象一般に関しても目配りし、その分布や受容の様相、歴史的変遷などにも留意しながら分析を試みた。その結果として、明らかになったの

は次の点である。

まず、第一に沖繩の先島地方の離島を中心に陰陽道系説話は、先祖祭祀の行事とされる清明祭の由来譚として伝承されており、このことは清明祭自体の受容、浸透とその担い手を推測させる。つまり、こうした説話の伝播と定着の背景には、清明祭を広め、その意義を説こうとした意図があったことがうかがえるのである。それは清明という暦注に関する知識が、陰陽道系説話による説明を経て伝承されてきたことを示している。

第二に喜界島の双紙由来譚は先行するユタに関わる日光感精説話に結びついたものと双紙箱の由来を語るものがあり、後者は陰陽道系説話の変奏と解することができる。このことから、南島におけるトキやユタ等の宗教者の技能の由来を語る説話には二つの層があることが明らかとなった。従来、南島の巫俗とそれに関連する民俗において日光感精説話が基層に位置づけられる一方で、ソウシに関する伝承は二次的なものであるとされてきた「山下 一九七九 二四七―二四八」。しかし、ソウシに関する説話的伝承としては陰陽道系説話が伝承されている場合もあり、それなりに南島の民俗文化に根を張っていることも確認できる。ソウシを核とするこうした伝承からは、南島の宗教的職能者の宗教性のよってきたところをうかがうことができる。これらの知識やソウシ、さらに陰陽道系説話の担い手は、書物の知を操り得る宗教的職能者であった可能性が高いという見通しが得られるのである。

こうした点から南島においては、陰陽道の知識やそうした知識を操る存在に対してソウシという書物を意識するかたちで伝承が形成されてきたことを改めて確認することができる。そして陰陽師は存在しないものの、ソウシ即ち大雑書の写本の姿で陰陽道の知識が南島の民俗文化の中に流入し、展開を遂げているということが明らかとなった。トキやユタといった南島に特徴的な宗教的職能者に寄り添うものとして、書物の形象で陰陽道やそれに起因する暦や暦注、占いやまじないの知が存在しているのである。

今後は本稿で得られたこうした見通しが、南島の他の地域、島々での宗教的職能者やソウシおよびそれに類する存在にもあてはまるかどうか慎重に検討を進めていく必要がある。南島の風土は書物そのものの伝来、残存に決して有利ではない。それにもかかわらずこうした伝承が形成され、維持されてきたことにも注意しなければならないだろう。書物の民俗誌とでも言い得る視点で調査を進めて、陰陽道そのものの展開と陰陽道系説話との関連をさらに追究してみたいと考えている。

【注記】

(1) この点については別稿を準備しており、改めて論じる機会を得たい。

(2) 吉備真備伝承に関する最新の研究としては「諏訪山二〇〇九」を参照されたい。

(3) この点については「松石 二〇〇八」が近年の成果である。参照されたい。

(4) 引用は「岩瀬・松浪・富里・長浜編 一九八三 九八～一〇五」に拠った。

(5) 引用は「竹内 一九六九 一六八～一六九」に拠った。なお、この話は、戦前の「岩倉市郎編 一九四三」に収められている「太陽の下ろし子」(二四～二五頁)と同じものと言える。ここでは以下のように記されている。

ティダクムイ加那志(太陽の尊称)にウルシガー(下し子)があつた。その子は母一人の手に育てられて、七つになつた。或る日子供は外で遊んでゐて、朋輩から父の居らぬ子と言つて嘲笑はれたので、其事を母に話すと、母は今まで秘してあつた事を打あけて、「おまえは本当はティダクムイ加那志の子である」と語つた。

子供は自分が太陽の子だと聞いて、是非天に上つて太陽に会つて来なければならんと、母に暇を貰つて天に上つた。太陽の前へ出て事の次第を語ると、太陽は怒つて、「われは地上に子供を生んだ覚えはない。此子は連れて行つた鬼に食ませ」との事である。家来達は子供を鬼の処へ連れて行つた。鬼は喜んで子供を食はうとしたが、子供の位が高いのでどうしても近寄る事が出来ず、とうとう膝を居つて手を合はせて拝んだ。それで太陽も始めて自分の子であることを承知されて、子供に對つて、「汝

(うら) 母子に物を食ます。今は地上に降りて時を待て」と言はれ、子供を地上に帰された。

子供は牛飼ひをしてゐた。或る日牛を連れて原で草を食はせてゐると、天から御草紙(占書)がはたツと落ちて来た。落ちたと思ふと、いきなり牛がその御草紙をまる飲み込んでしまつた。そこで子供が牛の腹を一蹴り蹴つたら、牛は飲下した御草紙を吐き出した。その時の牛の血で御草紙の字は赤くなつたのである。それから牛が御草紙を一旦飲込んだ胃を、ソーシワタと言ふやうになつた。

天のさしおろし(命令)で、子供はお草紙(占者)になり、母はユタ(巫女)の始めになつたといふ事である。なお、ここでは仮名遣いは元のままとし、漢字は常用のものに改めた。同書には「御草紙は古昔のトゥキ(一種の占者)の宝典で、殆んどは写本で伝はつてゐる。処々に朱筆がある。トゥキの事をお草紙と呼ぶのは転化であらう。牛のソーシワタとは、第一胃の事。」と注記されている。

(6) 吉塚廣次氏(大正一一年生)からの聞き書き。二〇〇八年二月二日。

(7) 引用は「岩瀬・高橋・松浪編 二〇〇一 五六―五七」に拠つた。

(8) 加藤コハリ氏(大正八年生)からの聞き書き。二〇〇八年七月二八日。なお、A家でもまとまつた説話としてではな

いが、大よそ次のような伝承があるという。「この「神様」は当代より八代前の人だという。竜巻を起こしたり、暗くなるの家を出て明るくなつてから埃まみれになつて帰つてくることを繰り返していたが、家族にも何をやってゐるかは言わなかつた。台風が来たら屋根の上で念じると風が止んだ、という。(死んだ後)子どもたちが、人間ではない、といつて位牌も作らなかつた。今の屋敷地の井戸を当てて、移り住んだ。亀の肉を食べない、ということも聞いている。A家では盆の十六日には刀を磨くことになつていたが、今はもうない。刀の鞘が金で作られていたが江戸時代の終わり頃に盗まれてしまつたという。」「ある時、琉球王国でようやく生まれた一人の姫が大切にされていたが、病氣になつた。それをこの「神様」が、中柱で白い蛇を押さえているのでそれを外したら助かる、といつて病氣を治した。王様は「そなたこそ真の神である」といって「クニノカミレイコンダイジン」という名前をもらつてきた。お双紙箱はタンニヤミという荒木と中里との間の浜に着いた。四角い大きな箱だったという。「神様」が死んだ時に、中に入つていた書物を全て入れて埋めてしまつたと聞いている。」以上は、同日にA家の御当主からの聞き書きに拠る。

【参考・引用文献】

岩倉市郎 一九三四 「喜界島昔話(六)」『島』昭和九年前期、

四二三～四九二（島発行所、名著出版復刻）

岩倉市郎編 一九四三『喜界島昔話集』（三省堂）

岩瀬博・高橋一郎・松浪久子編 二〇〇一『喜界島の伝説・昔話―琉球の伝承文化を歩く・3』（三弥井書店）

岩瀬博・松浪久子・富里康子・長浜洋子編 一九八三『与那国の昔話』（同朋舎出版）

小川徹 一九七二『百姓門中における清明祭受容の一事例―『家風祭典』の紹介―』『日本民俗学』79 四九～五八（日本民俗学会）

—— 一九八七『家風祭典』が語る清明祭受容の顛末―『近世沖縄の民俗史』二九〇～二九七（弘文堂）

小川徹編 一九八七『羽地落穂集―旧羽地間切地方文書集成―』（法政大学沖縄文化研究所）

小池淳一 一九九三『陰陽道系説話の展開と位相』『口承文藝研究』16 六七～八四（日本口承文芸学会）

—— 二〇〇一『書くことと祀ること―沖縄宮古島のソウシ―』『民族学研究』65（4）三六二～三七五（日本民族学会）

—— 二〇〇九『南島民俗文化における書物の印象と伝承―先島と奄美―』『書物・出版と社会変容』6 一〇九～一二二（『書物・出版と社会変容』研究会）

諏訪山玲似子 二〇〇九『遣唐使伝承の形成と発展―阿部仲麻呂と吉備真備の説話を中心として―』『昔話―研究と資料―』

37 六一～九一（日本昔話学会）

竹内譲 一九六九『喜界島の民俗』（黒潮文化会）

常見純一 一九六五『国頭村安波における門中制度の変遷』東京都立大学南西諸島研究委員会編『沖縄の社会と宗教』二五～五八（平凡社）

平敷令治 一九九五『清明祭の受容―伊是名的事例―』『沖縄の祖先祭祀』九三～九七（第一書房）

深沢徹編 二〇〇四『日本古典偽書叢刊（第三卷）』（現代思潮新社）

松石江梨香 二〇〇八『簞簞抄』と『晴明傳記』―信太妻伝説の地方的展開―『説話・伝承学』16 一二三～一三五（説話・伝承学会）

美濃部重克 一九八八『語り物と説話・物語―説経「信太妻」の一流流―』『中世伝承文学の諸相』八九～一〇三（和泉書院）

山下欣一 一九七九『奄美説話の研究』（法政大学出版局）

【謝辞】

本稿は科学研究費による基盤研究（A）「日本における書物・出版と社会変容」、同じく「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて」（ともに代表・若尾政希・一橋大学）による成果の一部が含まれている。代表をはじめ関係各位に改めて謝意を表したい。また喜界島での調査にあたっては外内淳氏に格別の御高配を賜っている。その点も明記して御礼申し上げる。

（こいけ・じゅんいち／国立歴史民俗博物館）